

3月27日から30日まで、4日間の日程で行われた「フォーラム高山2000」は、1992年以来、9回目の開催ということになる。これまでの開催地のほとんどがそうであったように、今年も岐阜県高山市にある飛騨国際工芸学園の施設をお借りしてこのフォーラムを開催することができた。フォーラム高山は、現在日本に滞在するドイツ人留学生や企業のドイツ人研修生などと、DAAD奨学金によりこれからドイツの大学に留学することになる日本人学生やかつてのDAAD奨学金が集まり、討論と交流の機会をもつことを目的としている。今年は日本人の参加者6名、ドイツ人の参加者9名があり、スタッフとしては2人の講演者（メディア・空間デザイナーの向井知子氏、山口大学経済学部助教授の Marc Löhrl氏）と運営にかかわる6人がそれに加わった。

さまざまな領域を専門とする人たちが集まるため、毎年、特定の学問分野にできるだけ偏ることなく、一般的でかつアクチュアルなテーマを設定するようにしているが、今回のフォーラム高山では、テーマとして「メディア——ドイツと日本」が掲げられた。メディアを対象とする学問的な領域はいずれにせよ学際的性格をはじめからもっているとはいえ、それがとりわけかかわる領域の本来的な性格にその立場がやはり圧倒的に規定されることになる。メディアをテーマに据えた今回のフォーラム高山を開催するために先にあげた2人に講演をお願いしたときには、必ずしもそれほど明確に意識していなかったかもしれないのだが、結局はこのフォーラム高山という場において、メディアにかかわる中心的な領域が遡ることになったという印象を強く持っている。つまり、メディアデザイナーとして、創造の場におけるメディアにかかわる活動をドイツと日本において精力的に展開している向井知子氏、Publizistikを専門とし、日独双方のマス・メディア（とりわけ新聞）の実際の問題にもきわめて造詣の深い Marc Löhrl氏、そして今回のテーマ設定と進行にとりわけかかわり、とくに思想史的コンテクストにおいて展開されるメディア論を扱う私、山口の三人の関心領域は、現在メディアをめぐる言説において問題となる三つの中心的な領域に、はからずも対応したと感している。

とはいえ、それによって期待されるような幅の広い視野からのメディアの問題への総合的なアプローチを行うには、あまりにも制約や至らない点が大きかったことは認めざるをえない。プログラムの進行にかかわるものとして、なんとか総括的な視点からこれらの異なる領域をとらえる方向にもっていきたいという希望を強くもってはいたが、やはりそれぞれの領域に固有の言説のあり方が強く表面に出ることになった。しかし、それはもちろんごく自然なことであり、メディアをめぐる芸術活動や、日本とドイツにおける新聞の問題といった、それぞれの領域における紹介や問題提起——向井氏は *»Raum, Erscheinung und Menschenbild«* というタイトルでドイツ語による講演を、また Löhrl氏は *»Vergleich der Mediensysteme in Japan und Deutschland«* と題する講演を日本語で行った——が、参加者の大きな関心を引いていたということは確実にいえるだろう。今回は時間の関係で「フォーラム高山2000」の簡単な報告だけとなるが、次号でこの2人の講演をもとにした論文が掲載される予定なので、是非そちらをご参照いただきたい。また、講演を聴いていた参

加者だけでなく、講演者の2人も、メディアというテーマで日独双方の参加者によって発表とディスカッションを行うというこの催しに非常に共感を持ってもらうことができた。実は、今回のテーマを企画した段階で、「メディア」をめぐるテーマで少なくとも2年は行いたいと考えており、同一のテーマ名称ではないにせよ、次回のフォーラム高山でも何らかの視点において「メディア」を扱うこととなるだろう。その意味でも、今回の講演者との研究上の関係を保っていきたいと考えている。これまでフォーラム高山は、スタッフが参加者の交流の場を作るために尽力するという側面を強くもっていたのだが、スタッフ自身の研究交流の場としても、さらに展開していくことを模索しているといえるだろう。

そういったスタッフ側の構想はともかくとして、メディアそのものをとりわけ研究対象とするわけではないほとんどの参加者にとっても、フォーラム高山は、メディアを題材としつつディスカッションを行い、公式のプログラム以外にも毎晩のようにお酒を手にしてお互いに知り合っ、人的なネットワークを広げていくという機能を今年も十分に果たしたといえるだろう。参加者には毎年連絡先のリストを作成して、互いに連絡が取れるようにしているのだが、このところはメールやホームページによるやりとりで、ここで知り合った人たちのネットワークがいつそう活発に生かされているように感じる。